

日本語とトルコ語の同系性について

フェティ イルマズ カレリ

1. はじめに

日本語と世界のいろいろな言語の関係について、さまざまな比較研究がある。そしてそれらの研究を通し、日本語はアイヌ語、チベット語、韓国語、マライ語、ペルシア語などに似ているという事実が明らかになっている。

日本語は、語順、共通の単語の存在、動詞の語幹や接辞の構成から見る、トルコ語などとも非常によく似ている。そこで一時期、言語学会においてウラル・アルタイ語族の存在が想定されるまでに至ったが、この考えは現在では学説としてはほとんど顧みられなくなっている。日本語の語源には謎が多く、トルコ語との関係についても十分に学問的な比較検討がなされているわけではない。両言語の文法的な比較もなされているが、これも充分ではない。専門家のほとんどが英語やドイツ語を媒介にしながら両言語の比較研究をしている。しかし、両言語の類似点や関係を明らかにするのに媒介語は必要ではないと思われる。というのは、まさに媒介語のせいで両言語の関係が見えにくくなっているからである。これまでの研究では、両言語に類似点はたくさんあるが、細部を見ると異なる点も多く、語彙の共通点はほとんどないとされている。そして、例えば日本語の「味」「意味」「山」とトルコ語の **acı,im(i),yama** との間に見られる発音と意味の類似性は借用による結果として、あるいは偶然の一致として説明される。しかし、筆者はこのような意見には賛成できない。私目では、日本語とトルコ語は同系言語である。

2. 研究目的

日本語とトルコ語のどこが似ていると言えたら両者の同系性関係は証されるのか。それが一つの大きな問題である。本稿では、両言語が同系であることを指摘する一つの

指標として、「両言語でそのまま使われている類似した単語」を取り上げたい。トルコ語と日本語には、類似した単語が一般に思われている以上に多い。その数を考えると興味深い結果に至る。しかし、それよりもさらに興味深い点も見つかる。それは、見た目にはあまり関係のないように思われる動詞を構成する根元的な要素、すなわち**語根**がかなり多数の語において**同一**だということである。もちろん同一だというのは筆者の判断であり、これに対しては本稿で正当な根拠を示さなければならない。

本稿で主張しようとすることは三つある。**第一は**、日本語とトルコ語の基礎語彙が形態的に類似していることを示すことである。**第二は**両言語の文法体系の類似性を示すこと、そして**第三は**両言語における音韻体系の規則的な対応を示すことである。これら三つは、日本語とトルコ語の系統的同一性を証明しようとする本稿に課せられた必須の課題である。

ここで、本稿が従来の研究とは異質なものであるということ、したがっていわゆる先行研究に相当するものが存在しないことを断っておきたい。これまで、ウラル・アルタイ語族についてさまざまな研究がなされてきたが、類似した単語の存在を取り上げている先行研究はない。一方、アルタイ語族についての数少ない研究の中にはトルコ語と日本語の語彙を扱ったものもあるが、そこで扱われている単語の数は10語程度にすぎない。これは、両言語の同系性を論じるにはあまりにも少ない数である。なお、従来のアルタイ語族に関する研究では諸言語の共通の特徴が並べられ、その一つとして日本語以外のいずれの言語においても母音調和の現象が観察されると述べられている。そして、日本語においても古い時代には母音調和の現象があったといわれているけれども、このことは日本語の系統論と結びつけて論じられてこなかった。

3. 基礎語彙の比較

日本語とトルコ語が同系言語であることごとを裏付けるための最初の手順として、両言語の基礎語彙の中から同源と見なされる単語のペアを拾い出し、それに簡単な解説を加える。

「味」:トルコ語の aci(アジュ、アジ)に対応する。aciは「辛い」と「味」の意味で使われる。かつては「味」の意味で使われることが多かったように思われる。

「**哀れ**」:トルコ語の avare(アワレ)に対応する。avare はペルシア語由来の外来語とされている。ペルシア語における対応語は、「何もしないで、無職で生きている人」の意味で用いられるが、トルコ語の avare は「かわいそうな」という意味合いで用いられる。

「**字(アザ)**」:トルコ語の kaza(カザ)に対応する。Kaza は「字」とほとんど同じ意味で使われる。この語はアラビア語に由来する外来語だと言われている。しかし、アラビア語における対応語の意味は「運命」とか「運」といったものであり、「人間の住んでいる小さな村のような場所」という「字」と kaza の意味から遠く離れている。

「**在る、有る**」:対応するトルコ語は var(ワル)。意味は「在る、有る」と同じである。日本人が早口で「ある、ある」言うとき、トルコ人にはそれが var, var のように聞こえる。

「**仰ぐ**」:「敬う、上を向く、褒める」といった意味のトルコ語 övgü(オウグ)と同源であると考えられる。

「**洗う**」:直接に対応するトルコ語はないが、「きれいな、純粋な」を意味する arı(アリ)と関係がありそうに思われる。

「**ばらばら**」:対応するトルコ語 parçaparça(パルチャパルチャ)は、意味も使い方も「ばらばら」と完全に一致している。

「**呆ける、惚ける、暈ける**」:対応するトルコ語は bunamak(ブナマク)。一見、無関係のように見えるが語根が一致している。このことについては、動詞の関係を述べるところで説明をする。

「**乳**」:対応するトルコ語 cicik(ジジク)は「乳」を意味する。

「**毒**」:対応するトルコ語は agu(アグ)。カザフ語では ugu(ウグ)、uku(ウク)と言う。スミル語でも ugu(ウグ)と言うので、「毒」ははるか昔にまで遡る語かもしれない。

「**吹く**」:対応するトルコ語は üflemek(ウフレメク)。一見まるで似てないように見えるが、トルコ語の風をまねするときの発音 fu(フ)、fuu(フー)に大変よく似ている。これについては、動詞の関係を述べるところでまた触れる。

「**がらがらする**」:対応するトルコ語 gargarayapmak(ガラガラヤブマク)。複合動詞として用いられるところも両言語で一致している。

フェティ イルマズ カレリ

「原」:対応するトルコ語は hara(ハラ)。形態も意味も、日本語の「原」とほぼ同じである。ちなみに、トルコ語の hara は外来語だと言われているが、例えばフランス語の haros(ハロス)、ペルシア語の hira(ヒラ)、hara(ハラ)は馬を入れたための「場所、馬の建物」を表す。

「膝」:対応するトルコ語は diz(ディズ)である。トルコ語系のキリギス語では tiza(ティザ)と言う。なお、日本語の「肘」は「膝」の姉妹語で、これに対応するトルコ語は tirsek(ティルセク)、dirsek(ディルセク)である。

「いい」:対応するトルコ語の iyi(イイ)は、発音も意味も日本語の「いい」と同じである。

「家」:これに対応するトルコ語は ev(エウユ、エブ)である。

「黒」:これに対応するトルコ語は kara(カラ)である。

「濃い」:これに対応するトルコ語は「濃い」を意味する koyu(コユ)である。

「固い」:対応するトルコ語は katı(カトゥ、カティ)。「固い」ことを日本語で「カチカチ」と言うが、これとトルコ語の katıは発音がよく似ている。

「陰」:トルコ語の gölge(ゴルゲ)と対応する。この語の意味は「陰」と同じである。

「待ち伏せ」:この語の「伏せ」の部分に対応するトルコ語に pusu(プス)がある。

「斑(まだら)」:対応するトルコ語は madara(マダラ)で、その意味は「斑」と同じである。しかし、トルコ語の madara には「少しこわれている」という意味合いも含まれている。

「実入り」:オスマントルコ語では、国の税金のシステムを miiri(ミイリ)と言った。これが「実る」や「実り」に由来する語だったのは非常に興味深い。

「無し、(無い無い)」:これらの語形は、トルコ語の隠語として使われる naş(ナシ)、naşnaş(ナシナシ)、naynay(ナイナイ)、nanay(ナナイ)に対応する。

「織る」:対応するトルコ語は örmeK(オルメク)。この語については動詞の関係を述べるさいにも触れる。

「お宅」:トルコ語の otag に対応する。「お宅」も otag も「人の住む場所」、つまり「家」

のことを表す。

「汁」: 対応するトルコ語は şıra (シラ、シユラ)。なお; この語はペルシア語の šire (シレ)、ラテン語の siraeum (シラエム)、ギリシャ語の siraion (シライオン)とも似ている。

「平ら」: 対応するトルコ語は tayra (タイラ)。この語は、平らで少し枯れている草がある、広い土地を形容するのに用いられる。

「高(たか)」: 値段が高いことを意味する「高(たか)」に対応するトルコ語に paha (パハ)がある。[t]と[p],[h]と[k]との間に音韻対応が観察される。そこで例えば、トルコ語で雄の鳥を表す horoz (ホロズ)はギリギス語では koroz (コロズ)になっている。

「峠」: 対応するトルコ語は dag (ダグ)。ウズベク語では tog (トグ、トーグ)と言う。これは「山」を意味する。「峠」を意味する語として、トルコ語に tepe (テペ)、カザフ語に tobe (トベ)、toubе (トウベ)がある。これは日本語の「てっぺん」と関係がありそうである。

「種」: 同じ意味を表す語として、トルコ語に tane (タネ)、dane (ダネ)、tene (テネ)、dene (デネ)がある。形態的の違いは方言差を反映しているにすぎない。

「鶴」: 対応するトルコ語として、「鶴」を意味する turna (トゥルナ)がある。

「上手い、旨い、甘い、美味しい」: 対応するトルコ語は umay (ウマイ)。両言語の意味はほとんど同じであるが、トルコ語では「きれいな」という意味で用いられることが多い。

「山」: 対応するトルコ語として、yama (ヤマ)と「山地」を意味する yamaç (ヤマチ)がある。

「焼く」: 対応するトルコ語は yakma (ヤクマ)、yakmak (ヤクマク)である。意味は「焼く」と同じ。この語については、動詞の関係を述べるさいにまた触れる。

「銭(ぜに)」: この語にそのまま対応するトルコ語の単語はないが、「金持ち」を表す zengin (ゼンギン)の zen-の部分が「銭」とよく似ている。そして-gin の部分は中国語に由来する「銀」や「金」に似ている。

日本語とトルコ語における基礎語彙の比較を終えるにあたって付言しておきたいことがある。ここで改めていうまでもないが、上に列挙した日本語の単語はすべて日本語における固有語であり、いわゆる借用語は含まれていない。日本語とトルコ語の同系性を論じようとするのだから、借用語を比較の対象としないのは当たり前のことである。しかし

フェティ イルマズ カレリ

注目すべきことに、中国語から借用された日本語の単語、すなわちいわゆる漢語の中に、トルコ語の単語と同源ではないかと思われるものが存在する。例えば、「遠近」-engin (エンジン、エンキン)、「行儀」-görgü (ゴルグ)、「火山」-kazan (カザン)、「野蛮」-yaban (ヤバン)、「毫碌」-moruk (モルク)などのようにである。

4. 文法体系の比較

第一に語順について言うと、主語(S)と目的語(O)と述語動詞(V)の順序が日本語でもトルコ語でもSOVとなる。文中に占める助詞の位置も両言語で一致している。例えば:

Ben dün mektub u yaz dı m.
私 昨日 手紙 を 書く 過去 私
私は 昨日 手紙 を 書いた。

また、動詞に目を向けると、語幹と接辞の構成が同じであることがわかる。例えば:

Yaz dı ril di
書く 使役 受身 過去
書か せ られ た

また例えば:

Endişe len mek / Endişe len dir mek
心配 す る / 心配 さ せ る

さらに、形容詞の使い方もたいへん似ている。両言語とも、形容詞は名詞の前に置かれる。例えば:

Kırmızı araba / Sağlık lı kişi
赤い 車 / 元気 な 人

ところで、トルコ語の形容詞には日本語の「い形容詞」や「な形容詞」といった区別はない。しかし、次のような例から、かつてはそのような区別があったことがうかがわれる。

例えば:

- (a) Sağlık lı kişi
 元気 な 人
- (b) İyi kişi
 いい 人
- (c) Kuvvet li erkek
 強 い 男

日本語の形容詞語尾に相当するものがトルコ語にもあるといえそうである。すなわち、日本語形容詞に付く「い」や「な」に当たるものとして、li(リ)や lu(ル)が想定であるかもしれない。

次に、造語法に注目すると、これも両言語の間に著しい類似点が見られる。例えば:

göz	/	göz	lük	/	göz	lük	çü
眼	/	眼	がね	/	眼	がね	屋
kitap	/	kitap	çı				
本	/	本	屋				
balık	/	balık	çı				
魚	/	魚	屋				
uyu	mak	/	uy	ku	/	uyku	lu
眠	る	/	眠	り	/	眠	い

以上は日本語とトルコ語の文法講座の類似点としてすでに指摘されてきたことであるかもしれないが、以下、専門家たちが注目してこなかったことに触れておきたい。最初に、日本語とトルコ語における助詞が類似していることを下の例によって確認する。

- (a) Ben ev e gidi yor um.
 私 家 へ 行く 現在 私
- (b) Sen ile sinema nin önün de bulusalim mi?
 あなた と 映画館 の 前 で 会いましょう か。
- (c) Ben im kitap
 私 の 本

フェティ イルマズ カレリ

(d) Sen **in** araba
あなた の 車

(e) O **nun** semsiye
彼(彼女) の 傘

これらの例に見られるように、文あるいは句を構成する諸要素の順番は両言語間で完全に一致している。そして、日本語の「へ (he-e)」「で (de)」「の (no)」という助詞とトルコ語の **e**(エ)、**de**(デ)、**in**(イン)という助詞との間に対応関係が見られる。ちなみに、トルコ語では母音調和の影響で **e**(エ)が **a**(ア)に、**de**(デ)が **da**(ダ)に変わる場合もある。同様に、**in**(イン)は **nin**(ニン)、**nun**(ヌン)に変わることがある。しかしこの助詞は、古い時代にはもっぱら **nun**(ヌン)、**un**(ウン)という形で用いられた。この形と日本語の「の (no)」との類似性は無視できない。

さて次に注目を引くのは、日本語の「**～せずに**」に相当する形態としてトルコ語に**～sizin**(シズイン)という語が存在することである。例えば：

今日は 勉強 **せずに** 終わった。
Bugün dersçalışmak **sizin** bitti.

何も 言わ **ずに** 出て 行った。
Hiçbirşey söylemek **sizin** çıkıp gitti.

次の例におけるように、日本語の「**～ました**」に相当する形態としてトルコ語に**～misti**(ミシティ)があるというのも注目すべきである。

今日は 学校 に 行き **ました**。
Bugun okul a git tim.
Bugun okul a git **miştim**.

さらに、次の例におけるように、日本語の「**～ている**」とトルコ語の**～tedir**(テディル)との類似性にも注目しなければならない。

勇 さんは 会社 へ 行っ **ている**。
Isamu bey şirket e gitmek **tedir**.

ところで、日本語とトルコ語の間には言語学者が大した興味を引かないだろうと思われる面においてもおもしろい類似点がある。それは、日本語の諸方言に見られる文末表現との類似点である。例えば：

- (a) 行く **だ**。
 Git **da**.
 (b) 読む **だ**。
 Oku **da**.
 (c) 行く **べ**。
 Git **be**.
 (d) いい **べ**。
 İyi **be**.

また例えば：

何をし **よん**。 / どこへ行き **よん**。
 Ne (yi) yapi **yon**. / nere ye gidi **yon**.
 雨が降り **よる**。 / 彼は行き **よる**。
 Yagmur yagi **yor**. / o gidi **yor**.

さらに、次のような文末表現の「ね」と **ne**(ネ)も注目に値する。両者は、その機能面、すなわち話しての述べていることが「真」であることを聞き手に確認する機能を果たす点においても共通している。

美味しいです **ね**。 / いいです **ね**。
 Lezzetli (mi)dir **ne**. / iyi (mi)dir **ne**.

ところで、両言語に観察最大の相違点は、先にあげた例文にも見られているように述部の末尾に所有者や主語の人称を表す人稱語尾が付される点である。このような人稱表現の差がどのように生まれたかについては筆者の理解を超えてはいるが、それは共通祖語から多くの言語が派生した後に生まれたものであろう

5. 音韻の規則的な対応

日本語とトルコ語の間には、一定の音韻関係が観察される。それは、日本語の [ao][oe][o] がそれぞれトルコ語で [ev][av][v] に変わっているということである。例えば、「倒れ [t+ao+re/ta+o+re]」がトルコ語では [d+ev+rilmek/de+v+rilmek] になり、「吠える [h+oe+ru/ho+e+ru]」が [h+av+lamak/ha+v+lamak]、「仰ぐ [a+o+gu]」が [o+v+gu] になっている。そして、日本語の [ae] がトルコ語で [ay] あるいは [y] に変わっているようである。例えば、「耐える [ta+e+ru/ta+ae+ru]」がトルコ語では [da+y+mak/d+ay+mak/da+y+anmak] になっている。また、「帰る [k+ae+ru/ka+e+ru]」が [k+ay+tmak/ka+y+tmak] になっている。そして、日本語の「i」に相当する部分が、トルコ語では [y] に変わっている。例えば、日本語の「平ら [ta+i+ra]」が [ta+y+ra]、「うまい [uma+i]」が [uma+y]、「いい [i+i]」が [i+y+i] になっている。

次に、動作を表す動詞が日本語とトルコ語の間でどのような関係になっているかを考察してみよう。トルコ語の動詞は複合動詞を除いて外来語がほとんどないといわれているので、日本語とトルコ語の親戚関係を明らかにするには動詞の関係を調べるのが何よりも大事である。日本語とトルコ語の動詞を取り上げて両者の音韻対応を論じる前に、トルコ語の動詞の形態について一般的な説明をしておきたい。

トルコ語の動詞は、「語幹＋介入子音＋語尾 (lemek/lamak/mek/mak)」からなる。日本語の動詞が「語幹＋語尾 (ル/ム/クなど)」からなるのに似ている。異なるのは、語幹と語尾を連結する介入子音が日本語にないことである。この事実をふまえた上で日本語とトルコ語の動詞を比較し、両言語の間に音韻の規則的な対応が見られることを確認することにしよう。

「開ける、空ける、明ける、/開く、空く、明く」: これらは意味的に異なっているが、すべて同源である。これらをローマジで書けば、akeru あるいは aku になる。そこで、いずれの語も語幹は a (ア) だと言える。トルコ語では acmak (アチュマク) つまり「a (語幹) + ç (介入子音) + mak (語尾)」になっている。[ç] 音は [k] 音が硬口蓋音化したものである。

「暴れる」: 語構成は「aba (語幹) + reru (語尾)」である。対応するトルコ語は「aba (語幹) + r (介入子音) + mak (語尾) = アバルマク」であり、現在のトルコ語では abartmak (アバルテウマク) になっている。

「呆ける、惚ける」: 語構成は「bo (語幹) + keru (語尾)」である。対応するトルコ語は

「bu(語幹)+n(介入子音)+mak(語尾)」である。現在では bunamak(ブナマク)の形で同じ意味を表す。

「吹く」: 語構成は「fu(語幹)+ku(語尾)」である。対応するトルコ語は「üf+lemek=ウフ+レメク」である。これは関係のない語のように見えるかもしれないが、トルコ語系のウイグル語で「pu+l+mak」(プ+ル+マク)、「pu+li+mak」(プ+リ+マク)、「pu+li+mek」(プ+リ+メク)となっていることから、同源であると判断される。

「吠える」: 日本語では一般的に野生の動物が鳴く行為を表すこの語は、「犬」の鳴き声に由来する語であったと考えられる。これは、トルコ語で犬の鳴く様を表す havlamak(ハウラマク)という動詞と同源である。日本語の「吠える」の語構成は「ho(語幹)+eru(語尾)」であり、対応するトルコ語の語構成は「ha(語幹)+v(介入子音)+lamak(語尾)=ハ+ウ+ラマク」になる。このように、動詞の語幹が日本語では ho(ホ)、トルコ語では ha(ハ)であり、これは同源であると判断される。

「息む」: 対応するトルコ語はkinmak(イキンマク)である。「息む」は「iki(語幹)+mu(語尾)」、kinmak は「ki(語幹)+n(介入子音)+mak(語尾)」という構成であり、両者の語幹は同源であると見なされる。

「切る」: この語の構成は「ki(語幹)+ru(語尾)」である。対応するトルコ語の構成は「ki(語幹)+y(介入子音)+mak(語尾)」であり、語幹部分は同源である。ちなみに、トルコ語の kıymak(キユマク)は「みじん切りにする」といった意味を表す。

「着る」: 上記の「切る」と発音が似ているこの語の構成は「ki(語幹)+ru(語尾)」であり、対応するトルコ語の構成は「ki(語幹)+y(介入子音)+mek(語尾)」である。現在のトルコ語では giymek(ギユメク)の形で同じ意味を表す。そして、同じ語は現在のトルコ語系の言語中に、同源と見なされる「ki(語幹)+yu(語尾)=kiyu(キユ)」という語が存在する。

「庇う(kabau)、被る(kaburu)」: 「庇う」の意味は、「被る」の意味から派生したものと考えられる。いずれの語も、語幹は「kaba/kabu=カバ/カブ」。対応するトルコ語の構成は「kapa(語幹)+t(介入子音)+mak(語尾)」である。この語は、「庇う」「被る」を意味する。

「帰る」: 対応するトルコ語は geri(ゲリ)という名詞の形であるが、トルコ語系のウズベク

フェティ イルマズ カレリ

語では動詞として「帰る」の意味で用いられている。トルコ語と他のトルコ語系諸語で、この語の語幹は kay(カイ)/ key(ケイ)/gey(ゲイ)である。ちなみに、対応するウズベク語は kaytmak(カイトゥマク)「kay(語幹)+t(介入子音)+mak(語尾)」という語構成を有する。

「織る」:対応するトルコ語は örmek(オルメク)であるが、この語には「編む」という意味も含まれている。「織る」は「o(語幹)+ru(語尾)」、örmek は「ö(語幹)+r(介入子音)+mek(語尾)」という構成であり、両者の語幹は同源であると見なされる。

「避ける」:対応するトルコ語は sakınmak(サクンマク)である。「避ける」は「sake(語幹)+ru(語尾)、sakinmak は「saki(語幹)+n(介入子音)+mak(語尾)」という構成である。

「刺す」:対応するトルコ語は saplamak(サブラマク)である。「刺す」は「sa(語幹)+su(語尾)」、saplamak は「sa(語幹)+p(介入子音)+lamak(語尾)」という構成である。

「擦る」:対応するトルコ語は sürtmek(スルトメク)。「擦る」は「su(語幹)+ru(語尾)」、sürtmek は「sü(語幹)+rt(介入子音)+mek(語尾)」という構成である。モンゴル語における対応語である zurgeh(ズルゲフ)を含めて、これらの語の語幹部分は同源であると判断される。

「取る」:対応するトルコ語は tutmak(トテウマク)。両語の構成は、「to(語幹)+ru(語尾)」、「tu(語幹)+t(介入子音)+mak(語尾)」である。

「焼く」:この語の構成は「ya(語幹)+ku(語尾)」である。対応するトルコ語は yakmak(ヤクマク)で、その構成は「ya(語幹)+k(介入子音)+mak(語尾)」である。

「遣る(やる)」:この語の構成は「ya(語幹)+ru(語尾)」である。対応するトルコ語 yapmak(ヤブマク)の構成は「ya(語幹)+p(介入子音)+mak(語尾)」である。

6. まとめ

日本語とトルコ語の語彙の類似性に関するここまでの考察は、次のようにまとめられる。

1) 日本語とトルコ語の間には、意味と発音が同一である語または語幹の数が一般に思

われているより多い。

- 2) 意味がまったく同じで、発音がやや異なっている単語の数も少なくない。
- 3) トルコ語の単語と類似している日本語の中には音読みのものもある。
- 4) 同源と見なされる日本語とトルコ語の単語の中には、スメル語にまでつながっている単語もある。
- 5) 日本語の「アオ(ao)」と「オエ(oe)」はトルコ語の「v」音に対応し、「アイ(ai)とイ(i)」はトルコ語の「y」音に対応する。このように、両言語の間には規則的な音韻対応が観察される。

参考文献

- Fuat Bozkurt(1999) *Türk Dili* (トルコ人の言語) T.C Kültür Bakanlığı
- İsmet Zeki Eyuboglu(2004) *Türk Dilinin Etimolojik Sözlüğü* (トルコ語の語源辞典)
Sosyal Yayınlar
- Muharrem Ergin (1986-16. 発行) *Türk Dil Bilgisi* (トルコ語文法など) Bogazici Yayınları
- Ahmet Bican Ercilasun (ed.)(1991) *Karşılaştırmalı Türk Lehceleri Sözlüğü* (比較トルコ語表現辞典) T.C Kültür Bakanlığı
- 岩淵 匡 [監修](2002) 『日本語の源流』 青春出版社
- 近藤健二(2005) 『言語類型の起源と系譜』 松柏社
- 砂川有里子ほか(1998) 『日本語文型辞典』 松柏社
- 竹内和夫(1990) 『トルコ語辞典』 大学書林
- 林 徹(1995) 『トルコ語文法の基礎』 東京外国語大学語学教育研究協議会
- 町田 健(2001) 『日本語のしくみ』 研究社

